

<エッセイ>

音楽をつくるとき、哲学は役にたつか Is Philosophy Useful When Writing Music?

ヤマモトショウ

Sho Yamamoto

「役にたつ」という視点は、私にとっての哲学や学び全般へのモチベーションとしては最も遠いところにあるもの、と思ってきた。なんとなく学問においては卑近な対象が具体的な目的になっているようなものがあまり上等ではない、というような青い思い込みがあったのも間違いないが、そもそも哲学というのが「何らかの成果を勉強できるもの」なのかどうかすら、私にはわからないというのも理由だったといえよう。しかし最近では意外と世の中では哲学を有用なものとして捉えたい風潮もあるように感じており、ビジネスパーソンが哲学を勉強することが流行っている、ということもその証左だろうとは思ふ。

近頃、自分の来歴が知られるにつけ、「哲学を勉強したことは音楽にどう役に立っているのか」ということは、よく聞かれることなので、一度真剣に考えてみようと思う。

大前提として、私は今現在アイドルを中心として楽曲制作やプロデュースを行う作詞家/音楽プロデューサーであり、かつてはバンドのメンバーでもあった。バンドをやっていた頃はまだ学生でもあり、自身の専攻は哲学（特に専攻と言えるのは分析哲学と言われる分野）、さらにいうとその前は数学を専攻していた時代もある。異色の経歴だといわれることも多いが、いずれにしてもそういったことを話すとやはりその「経歴が今の仕事にどうつながっているのか」と言う点が気になるということなのだろう。

まず、元も子もないことを言ってしまうと、何かを創作するときに、自分がそれまで経験してきたことが「役に立たない」と言い切るのはほとんど不可能だろうと思う。というよりも、ほとんど意識できないレベルで自分の経験がつくるものに影響を与えているのは間違いないことだろう。

例えば、今私は一つ前の文で「ほとんど意識できないレベルで」と書いたが、普通ならこれを「無意識に」と言う方が自然だと感じないだろうか。私は、特別に文字数を稼ぎたいというわけではないにも関わらずこの冗長な表現をむしろ当たり前のように選択していた。それは、「無意識」という語は現在ではごくごく普通に使われる一般化したものなのだが、哲学や心理学の文脈においては特定の意味をもった専門用語とも言えるからだ。私はそのせいで「無意識」という語を、無意識には使えなくなってしまうている。

逆に私が例えば歌詞において「無意識」という語を使ったとしたら、それは一般化した無意識という語の使用とは異なった意味内容を持つことに（少なくとも自分の中では）なる。

さて、今のところ、「役に立つ」かどうかというよりも、自然に影響を与えてしまうというような話しかしてないようにも思えるかもしれないが、実際にはその「自然に影響を与えてしま

う」というのが、役に立っているということの一つの現れなのではないかと思われる。

たとえば以前フィロソフィーのダンスというグループによく歌詞を書いていたのだが、(名前がそのままなのでお察しの通り) 哲学をテーマに歌詞を書くというのが一つのお題目だった。このグループの曲も含め、「哲学」がテーマになるような曲をみると、それらの中では非常にざっくりと「哲学用語」が使われているものの、別段それらは「哲学的」な使用をされているわけではない。

そもそも「哲学的」であるということが定義しにくいのはいうまでもないが、少なくとも哲学で使われるような用語を装飾的に使用することが「哲学的態度ではない」ということは哲学を学んでいれば「自然」に意識することのように思われる。

というのも、哲学が本来は常に「非哲学的」であろうとする試みであるように見えるからである。もう少し有り体にいえば、哲学的であろうとすれば、それはどうしてもそれまでの哲学に対して批判的な立場を取るものになるように思う、ということだ。だから用語によって装飾することで、「哲学的」であろうとするというのは、自家中毒に陥っているように見える。

そして、少なくともそれらを避けることに「哲学を学んできたこと」は役に立っていたはずなので、関心のある方は私が作詞した「哲学をテーマにした」作品をチェックしていただければと思う。

例えば「和風な」音楽をつくりたいと考えてみたでしょう。和風な、というのは日本の古典的なイメージ、ということだと思うが、これを表現するには音階の上ではいくつかの技法がある。(例えばヨナ抜きといわれる音階が有名である)。これらを使えば確かに「和風な」音楽になるのだが、実はこれが和風な音楽であるためには、それを「和風だ」と感じるリスナー側の共通認識が必要である。当たり前と思うかもしれないが、むしろそれが先行しているからこそ、その音階に対して「和風な」ものであると定義づけすることができるのだ。(とはいえ、この結論づけには哲学的、あるいは美学的な反論が十分に考えられる。そもそも音階のイメージというのが、概念的な音階そのものに備わっているようなものなのか、あるいは人の認識の側にあるものなのかという問題など)。

それに対して、哲学的というのは実際には「難解なもの」といったような共通認識しか存在しないのかもしれない。そのため、そのあまり世間的には馴染みのない「難解に見える」用語を使うというようなことが、哲学的であることの表れとして用いられることになるわけだ。

しかし私は今となってはこれが「哲学的」だとはとても思えないのだ。

こんなことに気づかないでいられたら、その方が幸せなのかもしれないが、しかし気づいてしまった以上は意識せざるをえない。それに、やはり借り物の言葉というのはあまり残っていないような気がする。別にそれに根拠はないのだが、実際哲学者たちも何かしら新しい形での説明を迫られて新たな用語を発明してきたわけで、だからこそそれらは今も意味のある形で議論の中に残っているのだろう。

そういった意味で哲学を学んだことは自分の哲学的態度に自覚的でいられるという点で、役にたっている。それが「役にたつ」という言葉の普通の意味ではないとしても。